

大通和座通信

YAMATOZA

日々新面目

其の二十六

安東伸元

海上自衛隊練習艦隊が今年度の実習遠洋航海に先立つ国内巡航に際して、三月下旬神戸港に入港しました。それに合わせて小田・金久両君を伴って停泊中の一日、旗艦「かしま」を訪れ、百八十名の実習幹部候補生を前に二時間の講話と狂言鑑賞という講演を行ってきました。この催しは平成十三年より始まり、そのきっかけをお作り下さった人物は順調に栄進され、今は幕僚長になられています。先日その方から早速礼を告げる便りが届きました。《……初めて先生にご講話いただいた平成十三年の実習幹部であった幹部の卵たちも、現在は二等海尉(中尉)として全国の部隊で活躍中でありますが、この夏には彼らも初級士官の段階を了し、一等海尉(大尉)に昇任する予定です。この六年間、先生に日本の古典について教えていただいた士官

の数は、累計およそ千名を超えることになりました。本当にありがとうございます。……》文面にある千名の数字に、私はいささか感慨めいたものを覚えました。この恒例行事については、これまで度々この通信で報告を重ねてきました。軍艦内の講堂に整列して、明らかに私の話す事に耳を傾け、真摯な反応を示してくれる二十代半ばの青年と毎年出会える事は、私にとってありがたくも嬉しくもある出来事です。長年月能楽に関わってきて、古典のメッセージを伝達する者として、自身の社会的存在が明らかに確認できる機会を一つ得ると感じられるからです。彼らは四月二〇日に、五ヶ月に及び遠洋練習航海の長旅につきます。今年の訪問国はポリネシアを中心にした十ヶ国十一寄港地とあります。やがて今年も諸外国の寄港地より発信された、実習幹部生たちからの便りが届くでしょう。練習艦隊の訪問は、異国の風物を届ける文化使節として各国の歓迎を受けます。歓迎のレセプションでは文化の交流があり、当たり前ながら若い防人たちへは日本文化や芸術についての質問が集中するに違いありません。彼らの中の多くは長い洋上生活の間に、読書をしたり私と一緒に歌唱した狂言謡を聞き込んだりして返答の準備をしているようです。便りはその事を熱く報告しています。まずわが身を知る大切さを自覚し、

その上で他と接した時に得られる、新しくて深い心の発見と収穫に感動している様子が伝わってくるのです。私はこのような場面に、日常生活と古典伝統的なものの出合いの原点を見ます。これがまさしく人間と生活文化が交わる真実の現場です。その現場で、労を惜しまず英知を傾けて古典伝統芸能の推奨に精励している無冠の人を、私は大勢知っています。仲間とも或いは同志とも呼ぶべきこの人々たちによる営々とした活動が、まさしく荒野を潤す滋雨になっていることは確かです。ところが社会の表層ではこの花も実もある活動が白眼視され、結果的に無意味なものとして踏みじられるような現実が在ります。二極対立のような図式が見えるのです。古典伝統を名乗る以上、それに相応しい由緒・故事・来歴の有無が問われます。そして多くの学術研究者とそれに連鎖する批評家は、専らその有無と格付けを評定するインテリジェンスの役目を果たします。さて、評定に従って国家と社会が主流と認定した特定者たちの集団を一極と考え、他に歴史的な名分をもたず従って格付けの対象にもならない故に、その芸能に携わりたいたいと望む場合、何れかの主流の家へ滅私奉公的に従属するか、或いは無籍の埒外者になるしかない者の集団を一極と分類して、二極と言っているのです。前者は伝統を継承する正統派であること

を誇示して保守を掲げ、後者は、基本的にその封建的守旧体制を批判する革新派と言えます。この二者二極が対立するという様相は、文化芸術の世界にあつては奇妙な構図と言わねばなりません。表現者の能力や資質が問われる前に、まず家の系図や血縁の審査が優先して重要視されるわけです。現代社会に生きていて、たまたま古典伝統芸能に関わつて古典の在り方を模索する中に、個人的に生まれてきた思想や表現行為というものがあつて不思議はありません。ところが自律して生きたいと望む者を異端視し、その存在意義と価値をも公平に評価しないという社会状況があります。これは、わが国が長年にわたつて施行してきた古典文化行政によつて作り上げられた状況です。例えば主流に座を占める家にあつて、男子の誕生を喜び、その子が成人しての襲名を祝い、やがて三代揃つての共演を祝賀するという図式以外に新人の登場はなく、それを物足りないとも不審とも思わない考えを持つた観客によつて、この状況が形成され支えられています。この様相を不審と思う観客は遠くの昔に日本古典伝統芸能から撤退し、西欧クラシックの世界に鞍替えしているのかもしれない。旧弊の価値観に縛られ、物事を真理に照らして公正に判断出来ない社会構図が、古典伝統芸能の世界のみならず社会の至る所に露呈してきた感

があります。社会の混迷と変容はすべてこの状況が原因で起こっているようにも思われます。ここにいたつて私は、この現状を一向に変えようとするしない国の姿勢に、いよいよ不審を通り越した憤りを覚えています。最近、美しい国づくりを審議する会議が総理大臣の提唱で組織されたという報道があります。その中で、日本文化を論じて「かつての日本人が備えていた、凛として氣品に満ちた立ち居振る舞いを…」という話がありました。これについては、またぞろ伝統的な行儀作法や、茶道・華道・弓道・書道などなどの稽古事が真しやかに採り上げられ奨励されるのでしょうか。今年度も大阪芸術大学と大阪府立東住吉高等学校への出講を続けることになりました。併せて大阪音楽大学大学院で、「芸術の諸相」という標題のゼミに合わせて六回の授業を担当します。島根大学は、研究科の授業であつたものが学部生を対象に変更され、後期に出かけて集中講義をします。萎えかける心身に喝を入れられるようで、若者と出会う機の頂戴をありがたく感謝しています。前号に記述しました妻の病変については、多くの皆さんからお見舞いのお言葉をいただき、療養の励みと清安を得ました。ありがたくお礼を申しあげます。二月末に退院して、只今週二日のリハビリ通院を続けていますが、何とか杖を外した自力歩行も可能

になり、極めて順調に快復しておりますので、どうぞご休心願います。



安東 伸元（あんどつ のぶもと）
一九三五年大阪生まれ。一九六四年能楽協会入会、狂言方能楽師になる。茂山忠三郎家同門。
一九八一年より教育機関へ出講。現在、羽衣国際大学名誉教授、大阪芸術大学・大阪府立東住吉高等学校・NHK大阪文化センターの非常勤講師。二一年、重要無形文化財（能楽）保持者総合認定を受ける。「日本能楽会」会員。「大和座狂言事務所」を主宰。

狂言を読む「仏師」

もろきゆう

あるコンビ二エンスストアで万引の一部始終が防犯カメラに撮られていた。それをテレビのニュースでは、何度も繰り返し流していた。万引きの様子を何度も見せられていくうちに「天知る地知る我知る」という言葉が想い浮かんだ。昔は神や仏、あるいは天が見ているという考えが少しは犯罪の抑止となっていた。ところが現代では神や仏に代わって防犯カメラが抑止になるのかと嘆息してしまった。悪事をはたらく者を捕まえ、処罰することはある程度社会の秩序を維持するものである。しかし、防犯カメラが秩序を維持するものではない。防犯カメラは単に事実を撮影しているだけであつて、悪いことをしてはいけないという考えを示しているわけではないからだ。人の心のありようを変えることは困難だ。かつては宗教がその役割を担っていた。信仰があれば悪事をはたらかぬよう人々を戒めることは可能である。そこで多くの人々の信仰心を得るために宗教ではさまざまな工夫がなされてきた。そのため「縁起（社寺・仏像・宝物の由来）」やそこに描かれている「奇瑞（めでたいことの前兆として現れる不思議）」が用いられた。

天徳三年、大納言橋好古の孫、行平が勅を奉じて因幡国の一宮を参拝した際、行平は病気になる。病床に伏す行平は、不思議な僧が来て「賀留津に行き、浮木を岸にあげ、祈るべし」と言う夢をみた。そこで賀留津にゆくと安大夫と名のる老翁がいて「海中に夜な夜な光るものがある」と言う。網をいれてみると長さ五尺ほどの薬師像だつた。これを拝むとたちまち行平の病は治癒した。そこでちいさな堂を建てて薬師像を安置し、京の都に像を迎えることを約束して帰京した。しばらくして後、門を叩く者があるのであけてみると薬師像が立っていた。行平は感嘆涕泣し、二条京極にある祖父の私邸へ、法儀をととのえて薬師像を移転した。長保五年の四月、その家を寺とした。のちに行平は因幡国守となり、賀留津の浜に赴任することになったが、烏丸御堂には伽藍が立てられ「因幡堂」と名付けられた。これが東京国立博物館所蔵の『因幡堂縁起』に描かれているあらすじである。後の時代に描かれた『都名所図会』には伝記に曰くとして、次のような内容を記している。「一条院の御宇長徳三年、因幡国賀露津の海面に夜々光あり。国司橋行平卿漁人に命じて網をおろさしめ海底を潜しむるに、光明赫奕たる薬師仏を引き上げ奉る。その後七年を経て長保五年四月七日に、行平卿の居館烏丸高辻に忽然として飛来した

まへり。すなはち館を仏閣に造りて安置したまふ。今の因幡堂これなり。」と実に簡潔に因幡堂平等寺の奇瑞譚を伝えている。さて、この縁起から読み取れることからは三つある。まず、この奇瑞譚の構成は鎌倉期から室町期に作られた寺院草創の縁起によくあるパターンだということだ。それは本尊となる仏にまつわる不思議があり、その本尊を祀るために寺院を建立したというものだ。例えば『誓願寺縁起』は天智天皇の夢想で二天女があらわれ、仏師の賢問子父子に阿弥陀如来像を彫刻させるよう告げる。そこで父子に勅命が下り、父は六臂の地藏、子は六臂の観音となり阿弥陀像を刻んだ。後、誓願寺が建立されたという奇瑞を載せている。これも仏像にまつわる奇瑞があり、後にそれを安置する寺院が建てられるという構成である。多くの縁起がこのような構成であった。次に因幡堂平等寺は平安時代に創建され、寺務は天台聖護院御門主、寺僧は真言宗でありながら、その縁起の不思議な奇瑞によって因幡堂という名称で親しまれてきた。そのため伽藍は次第に大きくなり、名所図会に描かれている伽藍は広大な敷地に因幡堂があり、周りを未社や書院や寺坊で囲んでいる。大ざっぱな言い方をすると、かなり大きな寺院であったということだ。三つめはこの寺の所在地である。二条京極から移転して烏丸御堂に

伽藍が立てられ、『都名所図会』ではその所在地を「松原烏丸通」としている。現在も因幡堂は本堂しか残されてはいないが、松原通に面したところにある。この松原通りを東へまっすぐ歩き、松原橋を渡ると六道の辻、西福寺・六道珍皇寺があり、さらに歩を進めると清水寺参詣道に入る。つまり松原通は人々が多く集まる参詣道につながる道、身分の低い人も高い人も集まる賤群集（きせんくんじゅ）する通りといえよう。そういう場所では様々な出来事が起こり、数多くの説話が作られたのである。たとえば清水寺はものぐさ太郎が高貴な身分の女房と出会った場所である。また、六道の辻は小野篁が地獄に入りした入り口があるといわれ、篁にまつわるさまざまな説話がある。また『一遍聖絵』をみると、つぎのような話が載っている。「上京した一遍が因幡堂で一夜の宿を求めたところ、寺僧から『この御堂は修行者風情は泊められぬ』と断られたため、やむなく縁側で寝ていた。ところがその夜、寺の執行民部法橋覚順の夢枕に薬師仏が立ち、『今夜大事の客人を得たるぞ、すみやかにご歓待いたせ』とお告げがあった。すでに夜半ではあったが覚順は急いで一遍を内陣へ請じ入れた。『このような靈験譚が清水寺から因幡堂まで、松原通り沿いに数多く残っている。

さて、狂言「仏師」は田舎者が仏像を買ったため都にやってきて、まんまとすっぱ（詐欺師）にだまされるという話である。すっぱが田舎者に仏像を渡そうと指定した場所は因幡堂の後ろ堂である。先に述べたように松原通りは賤群集する場所だ。この田舎者は都に来るのが初めてであり、少々が抜けている。だから、都でも庶民が容易に参詣できて、知名度の高い寺院を選んだのであろう。さらにもう一つの理由がある。それはこの田舎者への皮肉である。「わたしはこころざしの深い者で、一間四面の持仏堂を建立したのでそれに安置する仏像を買い求めに来た」と言うが、これは因幡堂の縁起とまったく逆である。仏像もなくて持仏堂を建立することが本当にこころざしの深い者なのか、という疑いをもつてこの狂言をみると「やはり、そうだったのか」という狂言特有の笑いを体験することができよう。それにしてもわざわざ因幡堂で人をだまそうとしたのは、神や仏の眼を気にしなかったということだろうか。

了



山田 師久（やまだ もろひさ）
大阪生まれ。本名・山田茂。一九八六年より安東伸元に師事。中世文学及び芸能を専攻研究。大和座狂言事務所の学術ブレーン。月例入輪讀会等の座長を務める。学問的指導の他、若いスタッフたちには人生問題の良き相談役として長兄的存在。高等学校国語科教諭。

風になりたい

「芸人として、ひとつの立ち位置」

森五六九(もりごろう)

「芸人に上手下手はなかりけり。その行く先々の水に合わねば」私の思うに、舞台人の役割は何もその場の「華」に限ったものではない。「風」という存在だつてある。まるで旅芸人のごとく全国各地を行脚する私は主催者に求められるとこんなコメントをする事が多い。「私はここの住民じゃありません。だから土にはなれません。けれども風にだつたらなれます。風は種を運びます。私はそんな風になりたいと思つていまず。「こんな事を思うようになったのもこの紙面にも再々紹介させて頂いている「劇団ふるさときやらばん」というミュージカル集団の影響に他ならない。客演として参加させて頂いたのが今からもう十年ほど前。日本のどこにもある農村を背景にした芝居である。どんな農村でも起こりうる出来事や問題さらにはその前向きな問題提議。一つの作品をほぼ四年かけて全国を廻る。私は急遽代演としてその五十ほどの舞台上に立つた。公演場所のほとんどが村の小学校の体育館。人口の少ない村や町で千人あまりを収容できる会場といえどもうそこしかない。特設ステージを組み照明を吊

るため、ヘルメットをかぶつた私は連日のようにトラスという鉄の固まりを担ぎ何度も体育館とトラックを往復することとなつた。ベテランであろうが新米であろうが客演であろうがやることは皆同じだ。役者全てが仕込みのみならず舞台転換までこなしましてしまつ。いや、役者ばかりではない。当の主催者つまり我々にとつてお客さんである地元のおじさんおばさんまでもが嬉々としてこの鉄の固まりを運んでいる。この劇団が行くところはどこもこんな調子。私はここで多くの事を学ばせてもらった。

この舞台がはねると役者は会場の出口に並ぶ。ただお客を見送るのではない。ただお礼を言つただけではない。ただ握手をするためにではない。肝心なのはその握手の強さを確かめること。感動の度合いは如実に握手に現れる。当時落語家として十五年選手だった私はそこで何より嬉しいお客様の一言を頂いた。それは「ありがとう」の言葉。その頃地域寄席に奔走していた私だったが、こんなにも喜んでもらえたことがついぞあつたかどうか。「ありがとう」ではなく「よかつた」という言葉は多々聞く。けれどもその多くは学習発表会などに見られるよつなお追従まじりの「よかつた」ではなかつたか。しかし、堅い握手と共に発せられる「ありがとう」には嘘がない。その時感動のあまりむせび泣いている観客

もいた。お爺ちゃんはお爺ちゃん役のところにお婆ちゃんはお婆ちゃん役のもとへ走る。でも、何故「ありがとう」なんだろう。それは「あんだ、私の気持ちを本当によく分かつてくれる。あんだが全部吐いてくれた。胸がすかつた。ありがとう・・・」という事である。私は田舎から出て都会で就職したものの都会に馴染めず帰ってきた農家の長男という役どころだったなので、やはりそれとおぼしき人が寄つてきた。つまり「ふるさときやらばん」は人々の日常の声が台詞となつて生きている。「フツーの人の日頃の暮らしの中にだつてステキに輝く瞬間や心を打つドラマがある。人々の目線で語り合うなかから作品を生み出していく。」そんな思いから生み出された。落語における甚平衡・喜六・清八。また狂言における主人・太郎冠者・次郎冠者・・・彼ら同様どこにもいるフツーの人々。時代背景が変わろうとも人間の情の部分はそう変わらない。そこにフツーの人々の共感の笑いがある。

ところで、この劇団にとつての最大の特徴は公演までのプロセスだ。劇団の制作班はまず綿密な地元調査と取材を行う。多くの人に会いこの芝居の公演に賛同してくれる地元の人々を見つける。そしてその人々を繋いで公演のための実行委員会をその土地で結成させる。農家の人々であつたり地

元の商店主、サラリーマン、役所勤め・・・つまりそれまで芝居に縁も所縁もなかった人々が実行委員として公演に携わることになる。中にはこれまで反目同士だった人もいるがこれがきっかけで打ち解けた人も多いし、結婚相手を見つけたケースも多々ある。ポスター貼りからチケット売り、協賛金集め、舞台設営、さらには会場前におでん屋台まで作ってしまう。実行委員の仕事は多い。もちろん善意のボランティアであることは言うまでもない。「ふるさとときやらばん」制作班はサポート役としてのあくまで陰の存在だ。そして、公演の成功と共にこの「公演のための実行委員会」は「村おこしのための実行委員会」にと生まれ変わる。ただの興行ではなく「祭り」としての公演がこの劇団の良さである。「祭り」とはプロセスを楽しむもの。またこうした「人おこし」こそ「村おこし」の王道。冒頭申し上げた「土にはなれずとも風になる」とはまさしくこの劇団の事なのです。風は種を運ぶ。

師走の声を聞く頃、毎年密かに楽しみにしている高座がある。淡路島にある潮見台センターでの公演。今から六年ほど前、四十年代五十代の地元の有志六人が集まって町を考える「むくち会」という会が結成された。発足メンバーの六名の「六口」と「無口」を掛けたと言う。勿論これは洒落で、

実際は丁々発止で冗談を言い合う仲間たち。

この一人が学生時代の友人で私に声がかかった。「地域コミュニティーの一環で自分らで演芸会をやるよと思ってるんや。」端から芸人呼んでどうしようという発想にならないところがいい。「それでいくらなんでも素人ばかりではあかんと言ったことになって電話したんやけど、空いてる日を教えて欲しいねん。ギャラほど出えへんねんけど」友人は半ば強引だったが何より旧友の依頼だ。それから今では毎年心待ちにしている。昨年で五年目。入場料は投げ銭だが千円二千円と決めて普通に頂くよりむしろ多く頂戴しているかも知れない。熟年世代による漫才やコント、歌謡漫談など皆真剣そのもの。何せ一年がかりの「祭り」である。何よりいいのは人に優しい笑い。お客も演芸を鑑賞するという目的以上に「町内の老若男女が集う」その状況自体を楽しんでいる。まさに「お茶の間」の再現といったところ。地域コミュニティーやそこから生まれる防犯の意識・・・よりよい町づくりこそ本来の目的である。この催しは町民が集うきっかけのひとつであり、声を掛け合う話題づくり。私も一席高座を務め、最後にはメンバーによる大喜利の司会を務めた。去年からは二十代の若者も加わるようになった。

「安心して皆が笑える町づくりをしよう。」

そのためにまず自分たちで何ができるか。その延長線上に生まれた町民による町民のためのひとつの演芸会。その日はおおいに盛り上がった。語り合い、笑い合い、楽しい打ち上げを過ごさせてもらった。美味しいお酒も頂いた。その席上私のコメントは「私はここの住民じゃありません。だから土にはなれません。けれども風に吹いたら風になりたいと思っています・・・ところが残念な事にここには最初から充分すぎるくらい種が蒔かれてありました。」・・・せめて「肥え」の足しにでもなればと願う今日この頃である。(了)

二〇〇七年三月二十八日



森五六九(もり ごろう)

大阪生まれ。落語名・桂蝶六。大蔵流狂言方安東伸元に師事。現在、放送芸術学院、大阪スクールオブミュージック専門学校、大阪シナリオ学校の各非常勤講師の他AECCAーチストカレッジの落語教室及び大阪府立桃谷高校特別非常勤講師など、「高座」ならぬ「講座」も勤める。現代社会にあつて、好ましい芸能人の在り方を模索中。

兆紀探求 「子供に教え学んだ事」

小田兆紀

今年も昨年同様無事に橋本子供狂言教室の発表会が済みました。以前皆様にお伝えしたと思いますが、初めての方もいらつしやるでしょうから少し説明させて頂きます。

和歌山県橋本市の子供狂言教室は平成十八年度で二回目、主催を財団法人スポーツ振興公社に移して始まりました。その中には第一回目の平成十七年度に受講した一期生の子供も数名います。初回の稽古が始まるまで二期生は一体どんな事をやるのだろうと緊張し落ち着かずそわそわしていたのですが、一期生は昨年一五回の稽古・発表会を経て得た「ひとつのことをやり遂げた」という自信と自負が見え、落ち着いていました。その空気を感じ二期生も一期生を見習って静かに話を聞くようになったという相乗効果を生んでいたのです。つまり一期生のピリツとした雰囲気は二期生を、ここは静かにしなければならぬところなのだとしてリードしているようなそんな緊張感があったのです。これは私達にとっても嬉しい事でもさかここまで成長しようとは思わずに、私達も、その空気のお陰で私達も、

去年より少し難しい演目に取り組ませてみよう、少し大変でも演目の数を増やしてみよう、と期待させてくれたのですが…。

発足当初は一期生と二期生との間に良好な緊張感があったのですが、やはりそこは子供同士。あつと言つ間に打ち解けていき、三度目位の稽古日にはまるで前から友達だったかのように稽古前に教室で遊ぶようになっていました。人間関係や交流も含めての狂言教室ですから仲良くする事は悪い事ではありません。しかし、一期生に求められていた先輩としての威厳や先輩として見せなければならぬ良い背中、良い緊張感を生んでくれるだろうという私達が当初期待していたものはなくなつていき悪く言えば馴れ合いとなつてしまつたのです。一期生側にも二度目という事もあり一度やった事だから大丈夫だろう、と油断する子供も出て緊張感が薄れてきました。あからさまな態度として表さないものの、個人に与えた課題や役の大小に伴うまいち乗り切らない、やる気を感じさせない子供も数名出てきました。そして一番の問題は、二期生と一期生

の間に温度差が生じてしまつた事です。あの子は二回目だから私より上手で当たり前、やっても仕方が無いといったような空気も流れはじめたのです。やはり子供ですからその辺りは敏感でそんな空気は伝染していくものです。今年静かに叱ろうと自分の

中で決めた目標もあつて、やっぱりと何度か檄をとばしましたが、大した効果は生みませんでした。子供達に伝わらないのは自分に真剣さが足りないからだろうかと悩んだりして、帰りの車で金久と二人「今年はどうなるだろう」と不安をこぼす日も多々ありました。

本来であれば飽きさせない工夫もするべきなのかも知れませんが、具体的に子供達の個性をみて配役や演目が決まり稽古が本格的に進行するのは七、八回目からです。もともと少ない稽古回数でそこまでフォローするというのは少々厳しいものがあります。何より私達は目新しい気ををたらつたような事をして伝える古典に意味はないと考えていますのでその信念は曲げずいつも通りに真面目に伝える事しか出来ません。

そんな不安を抱えていたある日、先生との会話でその事に触れた時に「不安は伝わるから君らがしつかりとした気持ちでいな」と駄目だ」と指摘を受けました。確かに、この子供達は大丈夫だろうかと余計な心配をするよりはその子供達を信じてむしろこちら側が「大丈夫、きつと出来るから」と導いてあげる必要があります。そして、その話の中でもう一つ見えたのが、個人の持つ「分」というものです。これまで私が何度も書いてきたように「自分の中で咀嚼されていない借り物の言葉で相手に何かを

伝えることは出来ない」という事です。背伸びした態度や言葉では大人は元より子供には絶対に伝わらない。自分に合った言葉や態度で精一杯接してあげる事が子供にとって良い事なのだと再認識し残りの稽古はそこを心がけるようにしました。最後の稽古でこれまであまり良い姿勢を見せなかったグループに対し大目玉をくらわせました。

「こんな程度では本番の舞台に立たせられない。何度も言っているように君らはやれるはず。君らの力がこんなものなら初めからここまで期待はしないが、そうではないはず。やれない、ではなくただやらないだけだ。動きが分からないというかも知れないがこれまでちゃんと稽古をつけている。覚えてないのは一回一回の稽古を大切にしていなかった。たった二十分の狂言を君らのような若くて頭の柔らかい者が覚えられないはずがない。今これすらも出来ない子は将来何をやってても出来ないよ。君らの本気を見せてみる」という内容でその怒号は周りの大人が驚くほどのものでしたが、あとのフオローをきくとバックアップスタッフの橋本市民狂言を楽しむ会の皆さんならやってくれると信じて思いのたけをぶつけました。今までは全然違った態度に子供達は驚いていましたが、そこから稽古場の空気は一変、ピリツとしたものになり初回の緊張感が見事に戻ってきました。実際

その後同会の皆さんがその怒られた子供達を連れて謝罪とやらせて欲しい旨を伝えに来てくれました。そこで私は「君らに狂言をさせたいからこそ、おじさん達は一緒に謝りに来てくれてるんだよ。自分の子供でもない血の繋がっていない君らにここまでしてくれる大人がいるんだという事、自分達の為に関係ない人に頭を下げさせたという事態の重さをよく考えて、最期の稽古をやろう。そして明日の舞台に臨みなさい」と告げると子供心に理解したのが、甘ったれた顔つきはなくなりはつとしたような顔に変わったのを今でも覚えています。

結果から申しますと見事そのグループは本番で化けました。もちろん他の子供達も堂々たる発表で、きつと十五回の稽古を通じて理解できたはずなんです。今までの関わり方はただやっていただけで、本当に一生懸命突っ込むというのはどういう事なのかという事を。私も金久も共通して持っている思いはとにかくやって終わりという発表会にはしたくない、狂言を通じて何かを感じてもらいたいという事です。やりたい事をやるには苦労もあるのだという事と遊びの延長の感覚で自分がただ楽しいだけではなく、厳しさや辛さを越えて得た楽しさこそ価値があると感じてもらいたい。そして、自分は一生涯懸命やれば出来るのだという自信と、それを評価してくれる人間がちゃん

といるといふ事、だからこれからも手を抜かず力いっぱい自分のやりたい事には全身全霊を込める、そうすればやり遂げた時の喜びが大きいのだという事を感じてもらいたかったのですが見事子供達はそれを成し遂げてくれたと思います。

もう一つ嬉しかったことは発表会の終わりに親御様が全員で挨拶に来て下さった事です。きつと、毎日接しているご両親だからこそ分かる子供達の微妙な変化に気付いたからでしょう。その子供達を変えたものは古典、狂言の力です。伝えた事の全部が理解出来なくてもいい、今わからなくても狂言を通じて得た自信というのは、頑張れば出来るのだという事や、相手を思いやれる気持ち。狂言に真面目に取り組んでくれた子供達が将来的に何の変化もないはずはありません。こちらが恐縮してしまう位感謝されました。そういう時この仕事をやっていて良かったと思つのです。

今後に課題を残す事も多々ありましたが、その反省点を生かしました今年も子供達に何かを伝えることが出来ればいいなと今から楽しみにしています。そして私自身子供達に伝えている事を偽りにしない為に日々精進する必要があると思えます。



小田 兆紀 (おだ ちようき)

一九七八年和歌山県新宮市生まれ。

本名・小田政明。大阪芸術大学舞台芸術学科卒業。大学の講義で安東の薫陶を受け、卒業後「大和座狂言事務所」に所属し研修を重ねている。二一三年のイラン海外公演に参加、この経験は演劇を目指す人間として自覚を定める開眼脱皮の貴重な経験となった。二三年以来、橋本市の「市民狂言を楽しむ会」講師をつとめている。

「命題」

金久蒼汲

海上自衛隊・日本国練習艦隊の文化講演へ招かれ、今年も練習艦「かしま」へ乗艦してきました。練習艦隊とは幹部候補生学校を卒業した初級幹部自衛官、つまり海上自衛隊の未来のエリートたちが卒業の証として行う遠洋練習航海のことです。彼らはこれから約五ヶ月間、幹部自衛官として必要な知識及び技能を修得し、資質を育成するための厳しい艦上訓練に臨むのです。またその間さまざまな国の港に寄港しながら、訪問国との友好親善の増進を図るのです。練習艦「かしま」の艦内講堂で私たちを待っていたのは女性一四名、タイ王国留学生一名、シンガポール留学生一名を含む初級幹部自衛官約一八〇名の精鋭たち。街中で見かける骨抜き若者とは明らかに一線を画す、一糸乱れぬ統制がそこにはありました。「感性を磨き、人格を作る古典」と題された安東先生のお話を一言一句聞き逃すまいと、真剣な眼差しで時折メモを取りながら聞き入る彼らの姿から、日頃の訓練教育の厳しさと、未知なるものを吸収しようとする健全な姿勢を感じ取りました。狂言を上演している時も、彼らの真直ぐな視線とスポンジのような吸収力は変わらず、演じて

いる私たちも普段とは全く違う張り詰めた緊張感の中、極めて丁寧な演技を心掛けたつもりです。聞くところによると、過酷な状況下に置かれる艦上での伝達ミスはそのまま命の危険に繋がるので、彼らは常に発声訓練を怠らないそうです。訓練を積んだ一八〇名による「雪山」の合唱は、艦のスタビライザーが効かなくなるのではないかと思うほどの大迫力で、これから臨む遠洋練習航海に向けた彼らの力強い意気込みを存分に感じさせてくれるものでした。終始清々しい緊張感の漂う講演の最後に、私はある自衛官から質問を受けました。その内容は「なぜ狂言を始めたのか、なぜ狂言を続けているのか。」というものでした。ほぼ同世代の人間が何を思ってそれぞれの道を歩いているのか、お互いに気になるのは当然のことであると思います。しかしながら私は少し返答に困りました。と言いますのは、その数日前自宅の引き出しの整理をしていたところ、ある文章を綴った一枚の紙が出てきたからなのです。

その文章は数年前、所属していた劇団を辞退し、失明の恐怖と手術の不安、行き場を無くした挫折感の中、数ヶ月の入院生活中に書かれた自筆のものでした。手術の注意事項が書かれたプリントの裏に、そのとき感じたことが連綿と綴られていました。「ポンコツの偏見」と題されたその内容を

一部抜粋したいと思えます。《某月某日、看護婦さんが歩行すら困難な患者さんのシモのお世話をしていた。患者さんの股に手を突っ込んでオシッコをさせてあげていた。小さな体を精一杯使いながら、患者さんの体を支えるため腰に添えられていた手がやけに印象的だった。本当に誰かが必要として困っている人に、直接手を差し伸べて実際に手助けをする。人に働きかけるとは、本来このようなことを言うのではないだろうか。舞台芸術、とくに演劇と呼ばれるものは果たしてどうなのだろう。観客に生きることの意味や死ぬことの潔さ、感動を与えるのだから、間接的にはあるが人の役に立つというのがよく耳にする意見だろうか。中略 では演劇を観に来る人たちはどのような人たちなのだろう。本当に誰かを必要として困っている人たちが、高い観劇料を払ってまでわざわざ劇場に足を運ぶだろうか。よほど思い入れのある人なら定かではないが、現状を知る限り、多くの観客は趣味や娯楽の域を出ず、また演じる側も楽しいから、面白いから、注目されたいからといった安易な理由が大半を占めているように思う。未だ自分が気付いていない確固たる信念を持って取り組まれている方々には大変失礼だが、かく言う自分も口ではキレイゴトを並べ立て自己暗示をかけながら、結局は楽しいから、注目されたい

からという思いが心の何処かに存在していて、今尚拭い去れないでいるというのが本音なのです。今になって思えば、歌えない踊れない容姿も並の自分が、畑違いの劇団に入団したというのも、劇団の、舞台だけで給料が貰えるという環境と、劇団 というネームバリューに甘えようとしていたように思えてならないのです。《退屈な病院暮らしの中でふとこんな思いに至ったのでしょうか。私は昔から演劇が好きではありませんでした。広島田舎暮らしでは生の演劇に触れる機会はありません、目にするものと言えばテレビ中継された、派手で面白おかしくて騒がしいものばかり。無駄にはしゃいでマシンガンのようにセリフを吐いて、意味不明な展開でお茶を濁すようなやり方が当時の私にはよく理解できなかったのだからと思うのです。趣味や娯楽としての演劇はもちろん必要です。しかしそれに関わるのは、できることなら勘弁して欲しいと今でも思っています。それでも何故か演劇といわれるものに興味だけがあります。演劇と言う動態表現芸術が持つ独特のメッセージ性に惹かれてのことなのででしょうか。恐らくその答えを探るために演劇を志したはずなのに、いつの間にか自分の苦手とする方向へ自分も誘い込まれていたことに愕然としたのを憶えています。看護婦さんが患者さんに直接働きかける姿

を目の当たりにして、私は自分のやるうとしていたことがどれだけ自分勝手な一人よがりであったかということを感じ知ったのだと思います。この文章はその後もしばらく続き、最後にはこう綴られています。《どんなに素晴らしい舞台でも、どんなに意味のある芸術でも、演劇で他人のシモのお世話はできないのです。》この悔しさと恥ずかしさは今でも心の奥底に眠っていて、時折起きだしては自分の無力さを思い知らされている気がします。さまざまに抱えながら、私が改めて安東先生の下へご挨拶に伺ったのは、この文章を綴ってからちょうど一年後のことでした。それから数年が経ち大和座に関わる今では、狂言という古典に触れることで変わっていく自分自身や、こども狂言教室を通して成長していく子供たちや、それを取り巻く大人たちの変化を目の当たりにすることで、自分に課した命題とでも言うべきこの文章に対する答えを、少しずつでも見つけているような気がしています。

「なぜ狂言を始めたのか、なぜ狂言を続けているのか。」ありきたりな答えなら幾らでも口にできます。しかし、自らに課した命題に対する答えを口にするには、まだまだ経験も努力も発想の転換も足りないようです。それでも「なぜ演劇に関わるのか。」

「なぜ狂言なのか。」「なぜ安東先生の下

にしているのか。」その自問に対する回答期限は確実に迫ってきているように思います。



金久蒼汲(かねひさそつきゆう)

一九七八年広島県呉市生まれ。

本名・金久寛章。大阪芸術大学舞台芸術学科卒業。小田とは同期。同じく安東に師事して稽古に通い卒業後「大和座狂言事務所」に所属して研修を積んでいる。演劇人としての肉体訓練の重要さを自覚して日々精進を怠らない律儀さを持っている。二、三年、イラン公演で処女海外旅行を果たす。二、四年インドネシア公演旅行に参加。

大和座狂言事務所関連

催しのお知らせ

五月

五日【土・祝】午後五時半開演 天満・天神繁昌亭

第一回『落語と狂言の会』

落語「鰻頭こわい」 桂蝶六

「鷺取り」桂雀喜

「転失気」桂吉之輔

狂言「盆山」 小田兆紀・原斗轟

「萩大名」安東伸元・森五六九・金久蒼汲

入場料 二 円(当日二五 円)

身障者・高・大学生 一八 円

小・中学生 一五 円

お問い合わせ

〇六六一六七・五二五「賑わいや」

〇六六三三二・四八七四「繁昌亭」

〇五七・二九九九九「チケットぴあ」

六日【日】正午開演 ホテルニューオータニ大阪

『縁あつてー乙女文楽 吉田光華の世界』

乙女文楽 / 吉田光華

狂言「仏師」 / 安東伸元・金久蒼汲

津軽三味線 / 泉紫風

料金 一五 円(着席スタイル・季節特別コース料理)

お問い合わせ 〇六六六九七・四九二五(光華の会事務局)

十二日【土】午後三時・七時

十三日【日】午後一時半・五時半

いちびり一家第十一回公演

『春が来た』(金久蒼汲が客演します)

会場 ウルトラマーケット(大阪城ホール内西倉庫)

入場料 前売り 一五 円(当日二 円)

高校生以下 一 円

お問い合わせ 〇八 二七八一・六二六

ichibirikk@yahoo.co.jp

<http://www.geocities.jp/ichibirikk/>

六月

六日【水】午後一時半 堺能楽会館

『大浜中学狂言鑑賞会』(非公開)

演習・狂言「附子」

十二日【火】午前十時 大槻能楽堂

『関西大学第一高等学校鑑賞会』(非公開)

演習・狂言「佐渡狐」

十八日【月】午後一時 大槻能楽堂

『市岡高等学校能楽鑑賞会』(非公開)

能「経政」・狂言「佐渡狐」

予告

二十日【水】午後二時

A&Hホールシリーズ公演

「古典伝統芸能と出会うひととき」その四十七
新シリーズ「真の古典力」

『閑吟集を謡つ』

入場料 会員 一〇〇円

一般 一五〇円

お問い合わせ

〇六六八七三二一六 セ「A&Hホール」

編集後記

私事になりますが、この4月無事に博士後期課程へ進学しました。これで私も「プロ」を目指す一人として、やっとスタートラインに立ったこととなります。羽衣短期大学（現在、羽衣国際大学）に入学し、安東先生と出会ってから10年という月日が流れました。この10年で「プロ」という概念が私の中で随分変わったように思えます。

大和座の狂言をたくさんの方に観て頂けるといふ喜びもありますが、大和座の若手が若手落語家さんとの交流を通して、更なる成長を遂げるのではないだろうかという期待感もあります。「プロ」同志のぶつかり合いは、互いを刺激し合い、その刺激が成長へと結びつけていくと思います。今年度も成長し続ける大和座をどうぞご期待下さい。

秀

私は、学べば学ぶ程自信がついて怖いものは減っていくものであり、「プロ」というのは、怖いものがなくなつた状態をいつのか思っていました。しかし実際はその反対で、学べば学ぶ程自分の至らないところをはつきりと見えてきて、その分不安も増えるのだということが分かりました。「プロ」というのは、自分の至らない部分を常に探してはそれを克服するために努力し続ける者を指す言葉なのかなと思います。10年ではまだここまでしか分かりません。真意の追究に10年という年月は決して長いものではないと気づいたことが、10年目を迎える私の小さな成長かも知れませんが、今年度から大和座の新しい試みが一つ始まります。ご存じの方も多いと思いますが、昨年9月15日に落語専門の定席として天満・天神繁昌亭がオープンしました。そこで『落語と狂言の会』を行います。

発行日 二〇〇七年 四月十八日
編者 許 秀美
発行者 安東 伸元

大和座狂言事務所

代表 安東伸元

〒五五五〇八四一

吹田市千里山東二丁目三之三

TEL 06(6384)5016

FAX 06(6384)0870

http://homepage3.nifty.com/yamatoza

e-mail: BYX04535@nifty.ne.jp